

第一章 中君の物語 匂宮との結婚を前にした宇治での生活

[第一段 宇治の新春、山の阿闍梨から山草が届く]

*藪し分かねば(田舎だからと見下して照らさないということもなく)、*春の光を見たまふにつけても(宇治山荘に降り注ぐ春の光を御覧になるにつけても)、「いかでかくながらへにける月日ならむ(どうして今まで生き永らえてしまった月日なのだろう)」と、夢のやうにのみおぼえたまふ(と父宮と姉君との死別が夢のようにばかり思えなさいます)。*「藪(やぶ)」は<草深い所=田舎>を言うらしい。「藪し分かねば」は<藪だからといって区別されないの=田舎だからと見下されないの>。*「はるのひかり」は花咲き誇る季節を知らせる吉兆で、此処では匂宮に都へ招待された姫の期待感を言うのだろう。しかし、父宮に続いて姉君を失った孤独な身の上に春が来ても、何の栄華が有るものか、共に喜んでくれる人が居てこそその地位ではないか、と姫は空しさも覚えるらしい。

行き交ふ時々にしたがひ(いろいろな事情が行き交うその場その場に依じて)、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ(花の色や鳥の声を同じ気持ちで見聞き暮らして)、はかなきことをも(日々の情緒も)、*本末をとりて言ひ交はし(和歌の上句と下句とを詠み合って)、心細き世の憂さもつらさも、うち語らひ合はせきこえしにこそ、慰む方もありしか(心細い人生の厭な事や辛い事も姉妹で語り合って来てこそ慰めようも有ったものを)、*「もとすゑをとりていひかはし」は注に<和歌の上句と下句を付け合うこと。短連歌の詠み方。故大君と中君とで。>とある。

をかしきこと、あはれなるふしをも(面白い時や悲しい時も)、聞き知る人もなきままに、よろづかきくらし、心一つをくだきて(姉君亡き後は共に聞き知る人も無いままに、全て色褪せて、自分ひとりで思い悩み)、宮のおはしまさずなりにし悲しさよりも(父宮が亡くなった時の悲しさよりも)、ややうちまさりて恋しくわびしきに(より以上に恋しく寂しくて)、いかにせむと、明け暮るるも知らず惑はれたまへど(どうしたものかと日が経つのも忘れて姫は生き甲斐を見失っていらっしやったが)、世にとまるべきほどは(生死の寿命は)、限りあるわざなりければ(天の定めなので)、死なれぬもあさまし(思うように後を追えないのも情けない)。

阿闍梨のもとより(山寺の阿闍梨から)、

「年改まりては、何ごとかおはしますらむ(新年、如何お過ごしでしょう)。御祈りは、たゆみなく仕うまつりはべり(宮様と姉君の追善行は怠りなく勤めております)。今は、一所の御ことをなむ、*安からず念じきこえさする(が、今はあなた様お一人の御安泰を丁重に仏に願い上げ申しています)」*「やすからず」は、むしろ「易からず」で<安直にではなく=丁重に>なのだろう。

など聞こえて(など申し上げて)、蕨(ワラビや)、*つくづくし(ツクシの山菜を)、をかしき籠に入れて(きれいな籠に入れて)、「これは、童べの供養じてはべる初穂なり(これは小坊主が仏のお供えように摘んだ初物です)」とて、たてまつれり(と贈って参りました)。*「つくづくし」は<つくしの異名。つくつくし。[季]春。>と大辞林にある。「つくし(土筆)」は<早春に出るスギナの胞子茎。筆状で淡褐色、節にはかまとよぶ葉がつく。頂部から胞子を出すと枯れる。食用。筆頭菜(ひつとうさい)。つくづくし。つくしんぼ。>と大辞泉にある。繁殖細胞の胞子だけの茎を、スギナの葉茎とは別に地下茎から独立させて地

表に伸ばすという生態は、むしろ分かり易いような気もするが、花粉植物の成功によって今では独特にも見える、ということらしい。

手は、いと悪しうて(字はとても悪筆で)、歌は、わざとがましくひき放ちてぞ書きたる(和歌はわざわざ一字ずつ書き離してあります)。「てはいとあしうて」は注に<僧侶らしい仮名文字になじまぬ書き方。一字一字放ち書きにした。>とある。仮名文字は漢字を簡素に崩した字のはずだが、書き慣れなければ書き難いのかも知れない。

「君にとてあまたの春を摘みしかば、常を忘れぬ初蕨なり (和歌 48-01)

「追善をを示すためしの初蕨 (意識 48-01)

*注に<阿闍梨から中君への贈歌。「君」は故八宮をさす。「摘み」「積み」の懸詞。>とある。「あまたのはるをつむ」は、「数多の張るを積む」が<何年も父宮の後世を見張り守って追善行を重ねている>で、「数多の春を摘む」が<何年も故宮に供えるべく春菜を摘む>ということらしい。「常を忘れぬ」は「初(心忘るべからず)」に掛かる洒落と、文字通りの<例年通り>の複意なのだろう。

御前に詠み申さしめたまへ(姫君に詠んで差し上げて下さい)」とあり(という文面でした)。「おまへに」は注に<歌に添えた文。「御前」は中君をさす。『集成』は「姫君にご披露申し上げます。手紙全体が側近の女房に宛てられている体裁。「しめたまふ」は尊敬表現。変体漢文に「令一給」の形で見え、男性用語」と注す。>とある。

[第二段 中君、阿闍梨に返事を書く]

大事と思ひまはして詠み出だしつらむ(故宮を大事に思い回して詠み出したらしい)、と思せば、歌の心ばへもいとあはれにて(とお思いになれば、阿闍梨の歌の趣きもとても真実味があつて)、なほざりに、さしも思さぬなめりと見ゆる言の葉を(形ばかりの然して実も無さそうに思える言葉)、めでたく好ましげに書き尽くしたまへる人の御文よりは(美しく手馴れて上手にお書きになる匂宮の御手紙よりは)、こよなく目とまりて(よほど優れて見えて)、涙もこぼるれば(涙もこぼれるので)、返り事、*書かせたまふ(姫君は御返歌を詠んで女房の手で書き取らせなさいます)。*「書かせたまふ」は注に<返事を女房に書かせる。『集成』「女房に文言を書き取らせる形の、いわゆる仰せ書きである」と注す。>とある。

「この春は誰れにか見せむ、亡き人のかたみに摘める峰の早蕨」(和歌 48-02)

「この春は峰の早蕨侘び尽くし」(意識 48-02)

*注に<中君の返歌。阿闍梨の贈歌から「春」「摘む」「蕨」の語句を用いて返す。「形見」に「筐」を響かせる。「誰」は大君、「亡き人」は父宮をさす。>とある。「筐(かたみ)」は<目を細かく編んだ竹かご。堅間(かたま)。勝間(かつま)。>と大辞泉にある。「蕨、つくづくし、をかしき籠に入れて」(一段)がフリになっていたわけだ。つまり、「つむ」は「詰む」でもある。「はる」は「晴る(心が晴れる→贈り物を受けた喜び)」で、「このはるはたれにかみせむ」は<折角の贈り物も共に喜ぶ姉は居ない>と、一人取り残された寂しさを詠んだ歌のようだ。

使に禄取らせさせたまふ(使者に褒美を取らせなさいます)。

いと盛りに匂ひ多くおはする人の(実に妙齡の魅力たっぷりな妹君が)、さまさまの御もの思ひに、すこしうち面痩せたまへる(様々な物思いで少し面痩せなさっているのが)、いとあてになまめかしきけしきまさりて(とても品良く優美な雰囲気が増して)、昔人にもおぼえたまへり(故姉君にも似て見えます)。並びたまへりし折は(立ち並んでいらっしゃった時は)、とりどりにて(それぞれに個性があつて)、さらに似たまへりとも見えざりしを(少しも似ていらっしゃるようには見えなかったが)、うち忘れては(うっかりすると)、ふとそれかとおぼゆるまでかよひたまへるを(見間違ふほど似ていらっしゃるのを)、

「中納言殿の、骸をだにとどめて見たてまつるものならましかばと(中納言殿が亡骸であつてもいいから残して拝し申したいと)、朝夕に恋ひきこえたまふめるに(故姉姫を朝夕に恋い慕い申しなさつていらっしゃるようなのに)、同じくは(同じように妹姫までは)、見えたてまつりたまふ御宿世ならざりけむよ(娶りなされる御宿命ではなかったんですね)」

と、見たてまつる人びとは口惜しが(と中納言の誠意と匂宮の薄情を見比べ申しあげて、姫の女房たちは残念がります)。

*かの御あたりの人の通ひ来る*たよりに(中納言家からの御見舞援助の使者が定期的に通つて来る際の近況報告で)、御ありさまは絶えず*聞き交はしたまひけり(殿と姫は互いの御様子を聞き知り合いなさつていらっしゃったのです)。尽きせず思ひほれたまひて(中納言殿は相変わらず故姉姫の面影を追い続けていらして)、新しき年*ともいはず(お目出度い新年にも関わらず)、*いや目になむ、なりたまへると聞きたまひても(涙に暮れていらっしゃるとお聞きになるにつけても)、「げに(なるほど姉君へのお気持ちは)、うちつけの心浅さにはものしたまはざりけり(一時の気まぐれではいらっしゃらなかつたようだ)」と、いとど今ぞあはれも深く、思ひ知らる(と妹君はいっそう感慨深く思い知られなさいます)。 *「かのおおんあたり」は<中納言家>のことらしい。普通の言い方なんだろうが、是を普通と感じる共通の生活感が私には無いので、妙に分かり難い。 *「たよりに」は事改まった御手紙ではなく<近況報告>だろう、と読んで置く。 *「聞き交はしたまひけり」は敬語表現なので主語は薫君と妹姫のようだが、本人同士が直接に手紙を遣り取りしていたわけではなさそうで、「聞き交はす」は人伝に<聞き知り合う>のだろう。 *「ともいはず」は<であるにもかかわらず>。現代語でも稀には使う気もする。 *「嫌目」は<涙目>らしい。

宮は、おはしますことのいと所狭くありがたければ(匂宮は宇治山荘へお出向きなされる事がとても監視が厳しく難しいので)、京に渡しきこえむと思し立ちにたり(姫を京へ御移し申そうと決心なされるに至りました)。

[第三段 正月下旬、薫、匂宮を訪問]

*内宴など、もの騒がしきころ過ぐして(御所での内宴などの、物騒がしい頃を遣り過ぐして、新年の催しが一段落すると)、中納言の君、「心にあまることをも、また誰れにかは語らはむ」と思しわびて、兵部卿宮の御方に参りたまへり(中納言の薫君は、「遣る瀬無い思いを話せるのは、この人の他には居ない」と思いあぐねて、兵部卿宮の御部屋に参上なさいました)。 *「内

宴」はく平安時代、宮中で行われた内々の公事(くじ)。正月 20 日ごろの子(ね)の日に仁寿殿(じじゅうでん)南廂(みなみびさし)に天皇が出御、公卿以下文人を召して詩文を作らせ、また酒宴を催した。>と大辞泉にある。幹部たちだけのメの新年宴会みたいなことだろうか。他の宴会が形式的になって、こういう私的な宴席こそが本番と思う人も居たのだろう。それでも公式行事となれば、それなりに形式・様式は定まってくるだろうから、結局は贅を競う余計な宴会だったのかも知れない。

しめやかなる夕暮なれば(物静かな夕暮れの事で)、宮うち眺めたまひて、端近くぞおはしましける(匂宮は庭を眺めていらして、縁側近くに出ていておいででした)。箏の御琴かき鳴らしつつ(十三弦を弾きながら)、例の、御心寄せなる梅の香をめでおはする(特にお気に入りの梅の木の香を楽しんでいらっしゃる)、*下枝を押し折りて参りたまへる(その手近な枝を薫君は押し折って匂宮にお持ちなさいます)。 *「下枝」は「しづいえ」と読みがある。下の方の枝、とは手近な枝。

匂ひのいと艶にめでたきを(匂いがとても情緒があって楽しげなのを)、折をかしう思して(良い機転に感じて)、

「折る人の心にかよふ花なれや、色には出でず下に匂へる」(和歌 48-03)

「白梅に似た能面の下心」(意識 48-03)

*注にく匂宮から薫への贈歌。『完訳』は「「花」は白梅。「折る人」薫が密かに中の君を慕うのかと、その下心を疑う歌」と注す。>とある。確かに、匂宮は薫君と妹君の仲を疑う、というか危ぶんではいた。そして、そのことは、場合によっては、折り入った話題に成り得る事でもある。が、此处では、特にその話題と限定する展開があったわけでもないのに、会って行き成りその話題になる、というのは腑に落ちない。むしろ、帰京以来の薫君の様子からすれば、薫君は女に淡白のような顔をしているが、姉姫には意外なほど思い入れがあったようだな、みたいな意味にも取れるし、それも含めて、取り敢えずは全般的な意味合いで、この白梅はずいぶん匂いが強いが、あなたも同じように表情は白っとしているが、意外に本心は情熱家みたいだね、と匂宮は薫君に軽口を叩いた、と読むのが素直に思う。大体、匂宮に限らず薫君も召人相手の性遊戯は盛んだろうし、政務に於いても華やかな立場で活躍して忙しいだろうし、言い出せば尽きないほどの豊富な話題がある筈だし、そういう今を時向く御両人が面談する、大きな背景を持った場面だということは、重要な情緒なのだろう。つまり、相当に実質の含みが有る言い方として味わうべき歌だ。その上で、薫君と妹君の仲を疑う、ということも、匂宮は意図しただろうし、薫君もその匂い宮の意図に気付いた、ということは有るのかも知れない。薫君の返歌の方は、確かに、妹君を強く意識した詠み方には成っているようだ。

とのたまへば(と匂宮が仰ると)、

「見る人にかこと寄せける花の枝を、心してこそ折るべかりけれ」(和歌 48-04)

「妙な勘繰り掛けられて、うかつに花も手折れない」(意識 48-04)

*注にく薫の返歌。匂宮の「折る」「人」「心」「花」の語句を用いて返す。>とある。「見る人」は、表意はく何気なく花を見る人>で、複意はく女を、特に宇治姫を面倒見る者>だろう。が、是は匂宮が薫君を「下に匂へる(臭いヤツ)」と揶揄した事に対して言い返した軽口だから、「心してこそ」が妹君を対象とした含みを持たせた言い方にな

っているのであって、薫君の本心としては、姉君に対する残念な気持ちを滲ませたのかも知れない。尤も、一ヶ月の忌籠もりをした薫君が、姉君との情事は無かったと言っても誰も信じないし、いくら相手が匂宮でも言えるものかどうか。まして自分の出生の秘密は決して他言できないのだから、説得力の有る話には成りそうも無いし、姉姫の立場からしても、何も言ってほしくないに違いない。「かこと寄す」は<託言(文句)を言う>と<香事(香り)が引き寄せる>。

わづらはしく(迷惑です)」

と、戯れ交はしたまへる(と冗談を言い合いなさる)、いとよき御あはひなり(とても良い御関係です)。

こまやかなる御物語どもになりては(実情のお話しになると)、*かの山里の御ことをぞ(宇治山荘の姫君の話題を)、まづはいかにと(「差当り如何ですか」と)、宮は聞こえたまふ(匂宮はお尋ねなさいます)。*かの山里の御こと」は何を指しているのか分からない。下文から逆推すると、姉君の逝去や葬儀や忌籠もりなどに付いて尋ねたように思えるが、実際には、匂宮が何か一言尋ねて、それに対して薫君が、滔々とか切々とかはともかく、長々と話し続けた、とは考え難い。で、匂宮は例えば、宇治はどうですか、みたいに曖昧な聞き方をする、というのはよくある。と、それに対して、答える方は何となく気になっている事を一言話す。と、聞き手はそれに対して何らかの感想を示して、同時に気になる点を更に聞く。と、話し手はそれに応じて話を進める。そんな風に面談は深まる事が多い。その最初の切り出しが、「まづはいかに(差当り如何ですか)」だったのではないか。であれば、「御こと」は<話題>というザックリした言い方になる。

中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと(中納言も故姉君との思い出の過ぎ去った日々がいつまでも悲しく)、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし(その出会いから今日までの事が忘れられないことを)、折々につけて(四季折々の場面ごとに)、あはれにもをかしくも(しみじみと感じ入ったことや面白かった事を)、泣きみ笑ひみとかいふらむやうに(人生泣き笑いとか世に良く言うその通りに)、聞こえ出でたまふに(お話し申しなさるので)、

ましてさばかり色めかしく、涙もろなる御癖は(まして中納言以上に女好きで涙もろい匂宮の御性格には)、人の御上にてさへ(他人の事情であっても)、袖もしぼるばかりになりて(袖も絞るほど泣きに泣いて)、かひがひしくぞあひしらひきこえたまふめる(中納言も話し甲斐があるというほどに熱心に聞き応えなさっていらっしやいました)。

[第四段 匂宮、薫に中君を京に迎えることを言う]

空のけしきもまた(空模様もまた)、げにぞあはれ知り顔に霞みわたれる(如何にも訳知り顔に霞立ち込めます)。夜になりて、烈しう吹き出づる風のけしき(夜になって激しく吹き出す風向きも)、まだ冬めきていと寒げに(まだ冬のようにとても寒そうで)、大殿油も消えつつ、*闇はあやなきたどとしさなれど(部屋灯りも吹き消えがちで、暗闇で物もあやふやな見え難さの中だが)、かたみに聞きさしたまふべくもあらず(香り高い御二人は、互いに話を中断なさる事もあります)。尽きせぬ御物語をえ*はるけやりたまはで(が、尽きぬ話にいくら話しても気を晴らすことでお出来に成れないまま)、夜もいたう更けぬ(夜もだいぶ更けました)。*「闇はあやなきたどとど

しきなれど」は注に『源氏積』は「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」（古今集春上、四一、凡河内躬恒）を引歌として指摘。>とある。薫君と匂宮なら香り高い者同士で、暗闇の中でも互いに相手の様子ははっきり分かる、みたいなことだろうか。*「はるけやる」は、「晴るく（気を晴らす）」と「遙く（長時間に亘る）」の複意語の連用形「はるけ」に、そのように仕向けるという意の「遣る」を強調語として重ねたもの、なのだろう。

世にためしありがたかりける仲の睦びを（世に例が無いほどの御二人の仲の良さなので）、「いで、さりとも（でも、そうは言っても）、*いとさのみはあらざりけむ（そういう気持ちの問題だけではなかったろう）」と、残りありげに問ひなしたまふぞ（と匂宮が立ち入った情の話まで聞き出しなさろうとするのは）、*わりなき御心ならひなめるかし（無類の好色な好奇心の成せるわざなのでしょう）。*「いとさのみはあらざりけむ」は注に<匂宮の詞。肉体関係はあったのだろう、と疑う。>とある。それらしい話のような気はするが、薫君がはっきりと<情事は無かった>とまで言ったとは考え難い。というか、言ったとしても冗談にしか聞こえない。だから、匂宮も本気で反論するとは思えない。薫君がどんなに本気で、専ら精神的な繋がりだった、みたいなことを言ってみても、男と女が体を許し合うことで得られた一体感の功罪無しには、男女の話は始まらない、と互いの女遊びの行状を知る者同士なら当然に考えるだろう。であれば、この「さのみ」は<気持ちの問題だけ>くらいの含みの有る言い換えが妥当だ。*「わりなし」は<無理だ。理に合わない＝基準外だ。>で<桁外れ>みたいな誇張表現。「みこころ」は<匂宮の好色心>。「ならひ」は<性向＝好奇心>。

さりながらも（そういう冗談もありながらも）、ものに心えたまひて（匂宮は恋愛や死別の切なさをご存知で）、嘆かしき心のうちもあきらむばかり（薫君の心情を晴らすように）、かつは慰め、またあはれをも*さまし（慰め且つ同情して貰い泣きもし）、*さまざまに語らひたまふ御さまの*をかしきに*すかされたてまつりて（様々に応対なさる匂宮の御聞き役ぶりの面白さに宥められ申し上げて）、げに、心にあまるまで思ひ結ぼほることども（本当に思い余って正気も失いそうなほど思い詰めていた悲しみを）、すこしづつ語りきこえたまふぞ（少しづつ話し申しなさる事で）、こよなく胸のひまあく心地したまふ（薫君はこの上なく胸の空く思いがなさいます）。*「さます」は<冷ます。覚ます。鎮める。>で、「あはれ」は<感極まった興奮＝此处では悲しみの涙>だから、「あはれをもさまし」はその激高を鎮める為の<同情を示す貰い泣き>なのだろう。*「さまざまに語らひたまふ御さま」は<匂宮の様々な反応の仕方＝聞き役ぶり>なのだろう。*「をかしき」は<見事なさま>というよりは、滑稽なまでの<面白いさま>と読んだ方が楽しい。匂宮は多分、分かる分かる自分にもこういう経験が有る、みたいなノリで失敗談、それは深刻なものではなく他愛無いものであっても実体験なので説得力が有る、を話したのだろう。*「すかす」は<透けさせる＝避けかわす＝無い物のようにする＝忘れる>で、結果、慰められるのだろう。

宮も、かの人近く渡しきこえてむとするほどのことども、語らひきこえたまふを（匂宮も妹君を近くにお渡し申そうと予定がある事をお話し申しなさると）、

「いとうれしきことにもはべるかな（それは嬉しいお話です）。*あいなく（止むを得ずの疎遠ですが）、*みづからの過ちとなむ思うたまへらるる（私にご紹介申した責任があると存じられますので）、飽かぬ昔の名残を（何かと物入りな御遺族の妹君を）、また尋ぬべき方もはべらねば（他に見舞う人も居ませんので）、おほかたには、何ごとにつけても（生活全般を何かと）、心寄せきこゆべき人となむ思うたまふるを（私が気を付け申すべき人と存じますのを）、もし便なくや思し召さるべき（もしや迷惑とお思いになっての事でしょうか）」 *「あいなし」は<不都合だ。折り合いが悪い。生憎だ。>みたいな語感だが、この「あいなく」の連用形は<具合の悪い事に>という副詞語用で、条件項提示

の前置句に見えるので、「また尋ぬべき方もはべらねば」に掛かると読んで置く。したがって、「思うたまへらるる飽かぬ」は「思うたまへらるる。飽かぬ」と句点で別文校訂とはせず、と言って、続き文の「思うたまへらるる」且つ「飽かぬ」という二重修辭ともせず、読点で「思うたまへらるる、」ので「飽かぬ」と読んで置く。また、何が「あいなし」なのかと言え、句宮と妹君の結婚は帝と中宮の意に反し、正式なものとしては認められないという不都合な事情であり、であれば、句宮がこれ以上は妹君に近づけない、という事態も有り得たわけだ。*「みづからの過ち」は、薫君が句宮の立場と帝の思惑を読み違えて、安易に句宮に妹君と引き合わせたこと、を言うのだろう。

とて(と薫君は句宮の不参を皮肉って嫌味がてら)、かの(姉姫が)、「*異人とな思ひわきそ(私同様に考えてくれ)」と、譲りたまひし心おきてをも(と愛人の立場を妹君に譲りなざる意向があった事も)、すこしは語りきこえたまへど(少しはお聞かせ申しなさったが)、*岩瀬の森の呼子鳥めいたりし夜のことは(名前を呼び合うほどの仲めいていた夜のことは)、残したりけり(言わずに残したのでした)。*「ことびとなおもひわきそ」は注に<大君が中君を薫に託した遺言。「総角」巻に語られていた。>とある。が、姉君が薫君に妹君を自分の変わりに愛してくれと勧めたのは、「遺言」としてではなく、妹君がまだ句宮の女になる前の総角巻三章三段あたりの話だ。*「いはせのもり」はく奈良県生駒郡斑鳩(いかるが)町竜田(たつた)付近にあった森。紅葉・ホトトギスの名所とされた。[歌枕]>と大辞泉にあり、参照歌に「神奈備の岩瀬の森の呼子鳥いたくな鳴きそ吾が恋増さる」(万葉集 1419)が指摘される。「よぶこどり」はく《鳴き声人が人を呼ぶように聞こえるところから》古今伝授の三鳥の一。カッコウといわれるが、ほかにウグイス・ホトトギス・ツツドリなどの説がある。>とある。カッコウが「吾子吾子(アコ、アコ)」と私を恋しがって鳴く、みたいな歌筋らしいが、薫君と妹君は名前を呼び合うような情熱的な関係ではなく、静かに語り合っただけだったはずだが、男女が二人だけで語り合うこと自体が、外形的に情事の有る仲と見做される、ということではあったのだろう。

心のうちには(薫君は内心では)、「かく慰めがたき形見にも(このように鎮め難い姉姫への思いの慰めにでも)、げに、さてこそ(まったくその姉姫の意に従って)、かやうにも扱ひきこゆべかりけれ(自分が妹君を娶れば良かった)」と、悔しきことやうやうまさりゆけど(後悔も次第に増して来るが)、今はかひなきものゆゑ(今はもう妹君と句宮が結ばれているので、言っても仕方が無いことなので)、「常にかうのみ思はば(こんなことばかり考えていては)、あるまじき心もこそ出で来れ(間違いもし兼ねない)。誰がためにもあぢきなく、をこがましからむ(それは誰にとっても不都合な馬鹿げたことだ)」と思ひ離る(と妹君への思いは絶ちます)。

「さて、おはしまさむにつけても(さて、妹君がお引越なさるにしても)、まことに思ひ後見きこえむ方は(その用意を親代わりに御世話申すのは)、また誰れかは(私の他にはいないだろうな)」と思せば(とお思いになれば)、御渡りのことどもも心まうけせさせたまふ(嫁入り道具などを薫君は御揃えなさいます)。

[第五段 中君、姉大君の服喪が明ける]

*かしこにも(先方の宇治でも)、*よき若人童など求めて(美しい若女房や童女などを探し集めて)、人びとは心ゆき顔にいそぎ思ひたれど(古女房たちは姫の上京を喜んで宮家住まいの準備をしていたが)、*今はとてこの伏見を荒らし果てむも(いよいよこの宇治を、古歌に隠棲地と詠まれた伏見ではないが、離れ住んで荒れ果てさせるのも)、いみじく心細ければ(故宮の思い出が遠のいて非常に心細いので)、嘆かれたまふこと尽きせぬを(姫はお嘆きになる事が尽きないが)、

*「かしこにも」は注に<宇治をさす。>とある。わざわざ注記があるほどに分かり難い語りだ。何となく当たりは付くが、話を宇治に振るなら、場面が変わるのだから、何らかの固有名詞を出さなければ、外観を省いて行き成り内部を映すような唐突感がある。こういう感性は本当に分からない。 *「よきわかうどわらはなど」は注に<きれいな若い女房や女の童など。>とある。山里暮らしとは違って、京の宮家でそれなりの体制で暮らすために若女房や童女を新たに雇い入れる、という話は玉鬘などの場合にも有ったし、その際にこういう言い方をするのも以前にあったとは思いますが、確かに分かり難い言い方だ。が、しかし、こういう場合にこういう言い方をする、という事に馴れば直ぐに文意が分かる、という例にも思えて、古文を読む難しさを改めて思うような複雑な感想だ。 *「今はとてこの伏見を荒らし果てむも」は注に<『花鳥余情』は「いざここにわが世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」（古今集雑下、九八一、読人しらず）を引歌として指摘。>とある。「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを頼ると、<さあ、ここで人生の残りを費やそう、菅原の伏見の里がそのまま荒れてゆくのを見過ごすのも惜しいので、という歌。 “菅原や 伏見の里”と詠われている場所は、平城京の西で垂仁天皇陵（菅原伏見東陵）の近く、現在の奈良県奈良市菅原町のあたりであると言われている。>とある。「すがはら」はスゲの生えた野原をいう一般呼称でもあって、スゲはイネ科とは違う中空茎の野草らしい。ただ、「菅原や」の言い方には菅原道真に因んでか、左遷地の意味合いは込められているのだろう。だから、政争で失脚した八宮が隠棲した<宇治>を<古歌にある伏見>の知名に準えたのだろう。

さりとても（そうかと言って）、またせめて心ごはく（また無闇に強情を張って）、絶え籠もりても*たけかるまじく（世間と断絶して山籠もりしても名誉になるわけでもなく）、「浅からぬ仲の契りも（浅からぬ仲を誓っても）、絶え果てぬべき御住まひを（途絶えてしまいそうな都から遠い宇治の山里暮らしを）、いかに*思しえたるぞ（どうして良いと言えるのですか）」とのみ、怨みきこえたまふも（と匂宮がしきりに上京を願い申しなさるのも）、*すこしはことわりなれば（さすがに尤もな事情なので）、いかがすべからむ、と思ひ乱れたまへり（どうしたものかと姫は悩みなさったのです）。 *「たけし」は「猛し」で、此处では<誇らしい。自慢できる。>あたり。 *「思ひ得（おもひう）」は<納得する。良いと判断する。>だろうか。 *「すこしは」は現代語と同様に<気は進まないが事情は分かる>みたいな言い方らしい。

*如月の朔日ごろとあれば（妹君の上京の予定日が二月の月上旬と匂宮の御手紙にに指示されていたので）、ほど近くなるままに（その日が近づくに従って）、花の木どものけしきばむも残りゆかしく（花の木々のつぼみが膨らんでくるのも見届けたく）、「*峰の霞の立つを見捨てむことも（伊勢の古歌にある春を待たずに山を去る雁のように上京するのも）、おのが常世にてだにあらぬ旅寝にて（雁が古里へ帰るのは違って、私は正妻としての本拠地でもない仮宿に旅立つようなものなので）、いかにはしたなく人笑はれなることもこそ（何ときまり悪く笑いものになることだろう）」など、よろづにつつましく（など何事にも気後れして）、心一つに思ひ明かし暮らしたまふ（姫は一人で抱え込んで思い悩んで暮らさなさいます）。 *「きさらぎのつたちごろ」は注に<中君の京への移転の予定。匂宮が言ってよこした日取り。>とある。 *「みねのかすみのたつをみすてむ」は注に<『源氏積』は「春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる」（古今集春上、三一、伊勢）を引歌として指摘。雁に我が身をよそえる。地の文が自然と心中文に移っていく叙述。以下「人笑はれなることもこそ」まで、中君の心中。>とある。相変わらずの難文だ。

御服も限りあることなれば(姉妹の服喪期間も三ヶ月と極まりが有るので)、脱ぎ捨てたまふに(喪明けに)、褌も浅き心地ぞする(褌なさるのも姉への弔意が浅い気がします)。「おおんぶくもかぎりある」は注に<姉妹の服喪は軽服で、三ヶ月。大君の死は昨年十一月。>とある。

親一所は、見たてまつらざりしかば、恋しきことは思ほえず(姫は母君をお見知り申し上げないので恋しくは思えず)、その御代はりにも(姉は母代わりでもあって)、この度の衣を深く染めむと、心には思しのたまへど(今回の喪服を親の服喪として濃い色にしたいと思い仰ったが)、さすがに、さるべきゆゑもなきわざなれば(さすがにそれは作法に合わない)、飽かず悲しきこと限りなし(哀悼の意を示し足りない)と悲しみが深いのです)。「おやひとところ」は<親のお一人>という言い方だが、父宮は故宮と称されるので、これは<母君>をいうらしい。母君と明示しないのは分かり難いが、こういう時にはこういう言い方を、と知るべきなのかも知れない。注に<母北の方は中君の出産直後に死去して、中君は顔を知らない。以下、地の文が自然と中君の心中文に移っていく叙述。>とある。

中納言殿より、*御車、御前の人びと、*はかせなどたてまつれたまへり(中納言殿から姫に禊行脚の御車と先払いの従者たち、魔除けの刀などが差し向けなされました)。*「みくるま」は姫が禊に出掛ける時に使うものらしい。山荘は宇治川に面していたかと思うが、禊は何処で行なったのだろうか。そういう説明が無いので、この「御車」の意味が私には分からない。*「はかせ」は注に<陰陽博士。>とある。方角占いの為の陰陽師なのだろうか。しかし、与謝野訳文には、この「はかせ」を「佩太刀」と解して<守り刀>としてあり、禊の為なら魔除けの刀の方が相応しいかと、此方に従いたい。ただ、「佩刀」は「御佩刀(みはかせ、みはかし)」という語用が多いそうで、此处で「御」が無い意味は分からない。

「はかなしや霞の衣裁ちしまに、花のひもとく折も来にけり」(和歌 48-05)

「悲しみが明けた途端にお目出度い」(意識 48-05)

*注に<薫から中君への贈歌。「霞の衣」は喪服。「立ち」と「断ち」の懸詞。「来」は「着」を響かす。「断ち」「紐解く」「着」は「衣」の縁語。>とある。「かすみのころもたちしまに」は<幽みの頃も経ちし間に>で、例えば転生期間が49日だとすれば成仏前の死者が現世に幽んで現れることも喪中にはあるとして、そういう<喪が明けた>という言い方にもなっているのだろう。「はかなしや」は<(か)墨の衣=喪服>を<裁ちし間に=仕立てたばかりだ>というのに>に掛かる意味としては<亡くなった姉君を悲しんで>だが、ざっくりと<気が付けば早いもので>という意味では喪明けに掛かっている。春霞が立つようになって春が来た、という歌筋には「はかなしや」は相当しないだろう。季節の春は循環するもので、廻り来るといふ事実認識は<計り知れないもの>ではない。「花のひもとく」は<春に花咲く>であり、華やかな<平服に着替える>であり、匂宮がその服を<紐解く>である。この下句の「花のひもとく折も来にけり」のイヤラシサは即物的に伝わるが、上句の方が出来映えは良さそうだが技巧が勝って、私には情緒が感じられない。

げに(なるほどこの贈歌のように)、色々いときよらにてたてまつれたまへり(見舞の品々は色とりどりの美しい衣服をお贈り下さいました)。*御渡りのほどの被け物どもなど(御引越の際に従者に与える祝儀などの)、ことごとしからぬものから(特別なものではないながら)、品々にこまやかに思しやりつつ(身分に応じた品々が細かく配慮されていて)、いと多かり(とても沢山ありました)。*「おおんわたりのほどのかづけものども」は輿入れに入用な衣服反物のことだろうが、であれば、

上文の「御車」もやはり上京用のものなのだろう。それを喪明けの日に届けて、もしかすると禊で試乗したのかも知れない。いや、実際には使わなくても、禊の記念品として差し上げた、ということかも知れない。だとすれば「御車」の意味も分かるが、しかしそうした説明は無いので、実の所は分からない。

「折につけては(こうした物入りの際に)、忘れぬさまなる御心寄せのありがたく(私たちにまで忘れずにいて下さる中納言殿の御配慮が有難く)、はらからなども(親族であっても)、え、いとかうまではおはせぬわざぞ(とてもここまでなさる方はいらっしゃいません)」など、人びとは聞こえ知らず(など女房たちは姫に聞かせ申します)。

あざやかならぬ古人どもの心には(地味に仕える古女房たちの心には)、かかる方を心にしめて聞こゆ(こういう実利が身に沁みて感じられます)。若き人は、時々も見たてまつりならひて(若女房は中納言殿の艶姿を何度も見慣れ申し上げて)、今はと*異さまになりたまはむを(今後は縁遠くお成りなのを)、さうざうしく(物寂しく)、「*いかに恋しくおぼえさせたまはむ(この山荘から足が遠のけば、中納言殿もどうして故宮や故姫を思い出しなさるでしょうか)」と聞こえあへり(と話し合っていました)。*「ことさまになりたまはむ」は注に<中君が匂宮と結婚することによって、薫との関係が縁遠くなることをさす。>とある。*「いかに恋しくおぼえさせたまはむ」は注に<女房たちの詞。「おぼえ」の主語は薫。>とある。問題は「いかに」が疑問か反語かだ。訳文では<どんなに恋しくお思いなされるでしょう>と疑問意に取ってあるが、薫君が妹姫が山荘を去ることを恋しがることはない。むしろ、薫君が今後宇治山荘から疎遠になれば、姉君への思いも薄まる事が予想される。それが女房たちの懸念だろう。であれば、この「いかに」は反語の<どうして~でいるだろうか、いや、それはない>だ。それに、中納言が疎遠になる事への、女房たち自身の感想は「さうざうし」と既に語られている。

[第六段 薫、中君が宇治を出立する前日に訪問]

みづからは(その薫中納言自身は)、渡りたまはむこと明日とての(姫が上京なさるのを明日に控えての)、まだつとめておはしたり(前日早朝にお見えになりました)。「みづからは」は注に<薫自身は、の意。直前の女房たちの噂を受けて「みづらは」とある。>とある。上文の「いかに恋しくおぼえさせたまはむ」の情緒を受けた語り口なのだろうし、その流れの軽快さや息継ぎの呼吸感は分かるような気もする。それに、段組校訂は後世の読者が勝手に割り振っているに過ぎないので、此处での段換えに疑問も有るが、場面転換に際しての主語省略はとにかく紛らわしく、確かに分かり難い。

*例の、客人居の方におはするにつけても(姉姫が生前の時と同じ、いつもの客間で妹姫との面談をお待ちになっている時にしても)、*今はやうやうもの馴れて(薫君は忌籠もりの時とは違って、今はずいぶん落ち着きを取り戻して次第に辺りも見慣れて)、
「我こそ、人より先に、かうやうにも思ひそめしか(私の方が匂宮より先に宇治姫を娶ろうと思い始めたものだが)」など、ありしさま、のたまひし心ばへを思ひ出でつつ(など姉姫の生前の姿やお言葉のお気持ちを思い出しつつ)、*「れいのまらうとゐのかた」は西南廂、いや西廂だろうか。注には<薫はいつもの通りに客間に控える。>とある。姫との面談までの控え室なのだろう。*「今はやうやうもの馴れて」は分かり難い文だ。が、「今は」の「は」は排他的な特定意を示す係助詞なので<以前とは違って、今は>という言い方だとすれば、「やうやうもの馴れて」は<狼狽していた忌籠もりの時とは違って、次第に姉姫亡き後の生活にも慣れて=落ち着きを取り戻して>という文意となり、「例の」が<姉姫の生前と同じ>という意味を帯びて来て、「つけても」の勿体ぶった言い方がやっとなりに

落ちる。逆に言えば、「例の」や「つけても」の語感が最初から掴めていれば、この「今はやうやうもの馴れて」は然程分かり難い文では無いのかも知れない。

「さすがに(深い仲には成らなかったが、それでも)、かけ離れ(姉姫は私を全く遠ざけて)、ことの外になどは(話に成らないなどとは)、はしたなめたまはざりしを(恥を搔かせなさらなかったが)、*わが心もて(私自身の出生のこだわりで)、あやしうも隔たりにしかな(変な風に余所余所しくなってしまったのかな)」と、胸いたく思ひ続けられたまふ(と胸痛く思い続けられなさいます)。
*「わが心もてあやしうも隔たりにしかな」は薫君が、自分のこだわりの所為で姉姫と打ち解ける事が出来なかった、と自分の方に問題があったと初めて責任を認めたように見えるが、全責任が自分に有ると思ったとか、姉姫の心情を理解したとかいうことは無いだろうし、其処まで姫の存在やその王家の誇りに拘った尊厳まで無視するようなことは、絶対に言って欲しくない。

*垣間見せし障子の穴も思ひ出でらるれば(思えば僅か半年前に姉妹の様子をこの部屋から、垣間見した襖障子の鍵穴も思い出されるので)、寄りて見たまへど(薫君はまた鍵穴を覗いて御覧になるが)、この中をば下ろし籠めたれば(仏間は他の襖戸も皆閉めてあって)、いとかひなし(暗くて中は見えません)。
*「かいまみ」は椎本巻五章四・五段で語られた楽しい話だが、何とそれは今年の夏のことだった。そして、その秋八月の故八宮の一周忌法要前に薫君は姉姫と情事無き夜を過ごし、法要後には姉妹の入れ替わり事件があり、八月末の彼岸明けには匂宮と妹君が結ばれ、しかし十月初めに素通り事件があり、それを氣に病んで姉君は十一月に逝去した、という僅か半年間での急展開だ。尤も、薫君の宇治通いは五年ほどにも亘っていて、今年で六年目になるかと思われるが、それもいよいよ終わるらしい。

*内にも(姫のお部屋でも)、人びと思ひ出できこえつつうちひそみあへり(中納言の来訪で、女房たちは姉姫を思い出して涙ぐんでいました)。中の宮は、まして、もよほさるる御涙の川に、明日の渡りもおぼえたまはず(姉姫はまして込み上げる涙の川に明日の上京も渡り越すことが出来ない気分で)、ほればれしげにてながめ臥したまへるに(呆然と沈んで横になっていらっしやるところに)、
*「うちにも」とわざわざ言うのも珍しい。薫君の視線を離れた語り手による状況説明なのだろうが、こういう言い方は省かれる事が多い。なお、姫の部屋は東母屋のはずだ。

「月ごろの積もりも(この一月ほどに積もった話も)、そこはかとなけれど(特にはありませんが)、いぶせく思うたまへらるるを(あやふやな点を)、片端もあきらめきこえさせて(少しお尋ね申して)、慰めはべらばや(確かめたいのです)。例の(いつものように余所余所しくして)、はしたなくなさし放たせたまひそ(きまり悪く遠ざけなさいますな)。いとど*あらぬ世の心地しはべり(明日は宮家にお移りなので、このようにお話しできるのは今日限りなのを、お会い頂けなければ、悲しい限りです)」
*「あらぬ世」は<あの世>をいう言い方でもあるようだが、此処で<死んだ気分>と言う意味は有るのか。「あらぬ」は<ありえない悲しさ>で、「世」は<事情や場面>のこと、と読む方が楽だ。

と聞こえたまへれば(と中納言が申し入れなされると)、

「はしたなしと思はれたてまつらむとしも思はねど(きまり悪く思われ頂きたくはないが)、いさや、心地も例のやうにもおぼえず(どうも気分が普通ではなく)、かき乱りつつ(取り乱して)、

いとどはかばかしからぬひがこともやと(ひどく場違いな御返事を申してもと)、つつましく(気が引けまして)」

など、苦しげにおぼいたれど(など姫は気詰まりにお思いだったが)、「いとほし(あまりに失礼です)」など、これかれ聞こえて(など女房の何人もが諫め申して)、*中の障子の口にて対面したまへり(中央母屋で御簾越しに南廂の中納言と対面なさいました)。*「なかのさうじ」は注に<薫のいる西廂と母屋の西面の境の襖。>とある。が、西廂は客の控え室で、西母屋は仏間だったはずだ。東母屋が姫の居室だろうから、「中」は中央母屋で、その「障子の口」は南廂との境目かと思う。即ち、南表の奥の間に薫君は座している、のだろう。

いと心恥づかしげになまめきて(中納言殿は女房たちが気構えるほど優美で)、また「このたびは、ねびまさりたまひにけり」と、目も驚くまで匂ひ多く(また今日は一段と貫禄がお有りだと目も驚くほど華やかで)、「人にも似ぬ用意など、あな、めでたの人や」とのみ見えたまへるを(他に誰もしない多くの引出物の準備など、なんと気の付く人だろうとばかりお見えになるのを)、姫宮は、面影さらぬ人の御ことをさへ思ひ出できこえたまふに(姫君は面影浮かぶ姉君の御蔭のように思い出し申しなさって)、いとあはれと見たてまつりたまふ(とても有難く思い申しなさいます)。

「尽きせぬ御物語なども(故人の尽きない思い出話は)、今日は言忌すべくや(今日は止めて置きましょう)」

など言ひさしつつ(など言い挟みつつ)、

「渡らせたまふべき所近く(あなたが引越しなさる二条院の近くに)、このころ過ぐして移ろひはべるべければ(もう暫くして私も移りますので)、*夜中暁と(夜中でも早朝でもの付き合いと)、つきづきしき人の言ひはべるめる(近い人を言うようですが)、何事の折にも、疎からず思しのたまはせば(どんな時でも遠慮なくご相談くだされば)、世にはべらむ限りは、聞こえさせ承りて過ぐさまほしくなむはべるを(生きている限りはお聞き申してお役立ち申して暮らして行きたいと存じますが)、*いかがは思し召すらむ(如何でしょうか)。人の心さまざまにはべる世なれば(人の考えは様々ですので)、あいなくやなど(却って迷惑なのかと)、一方にもえこそ思ひはべらね(一人では決めかねています)」 *「よなかあかつき」は注に<当時の諺か。親しい者どうしは時刻を問わず行き来する、意。>とある。 *「いかがは思し召すらむ」以下は何と中身の無い問い掛けだろうか。宇治姫は都暮らしを知らない。まして、二条院や三条宮邸の様子も分からないし、自分がどういう暮らしになるのかすら分かっていない。そういう人に、その暮らしでの近所付き合いをすべきか控えるべきかの判断などできるはずが無い。先が見えない姫の心細さを慰めるなら、「聞こえさせ承りて過ぐさまほしくなむはべる」とだけ言って置けば良いはずだ。そう言えば、姫の方は、都の事情も勝手も分からないので宜しく願います、と形だけでも応え易い。それを、わざわざ内実の有る答えを求めようとするのは、何か特別な意図が有るのか、薫君が少し変人なのか、私には何だか分からない。

と聞こえたまへば(と中納言が申しなさると)、

「*宿をばかれじと思ふ心深くはべるを(山荘を離れたくないと思う気持ちが深いので)、近く、などのたまはするにつけても(都での近所付き合いなどと仰られても)、よろづに乱れはべりて、聞こえさせやるべき方もなく(全てに心が乱れて、お応えのしようもありません)」 *「宿をばかれじ」は注に<以下「方もなくなむ」まで、中君の詞。『源氏積』は「今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をば離れず訪ふべかりけり」(古今集雑下、九六九、在原業平)を引歌として指摘。「里」を「宿」と言い換えて言ったもの。>とある。今になって分かった、苦しいものと、人を待つのは、だから、私を待っていた里には絶えず訪れるべきだった。みたいな歌筋は素直さ以上の面白味は無い。詠み方も「人待たむ」が前後に掛かるという有り触れたものだ。何処かに大喜利ものの仕掛けでもあるのだろうか。私には分からない。その所為か、此処でこの歌を引く意味も分からない。まして、「人待たむ」が<姉君が私の死出を待っている>という意味なら、本当に「言忌」だ。

など、所々言ひ消ちて(など途切れ途切れに言って)、いみじくものあはれと思ひたまへるけはひなど(非常に物悲しく思っているらっしゃる姫の気配など)、いとよう*おぼえたまへるを(とてもよく姉君に似ていらっしゃるのを)、「心からよそのものに見なしつる(自分で他人の妻にしてしまった)」と、いと悔しく思ひみたまへれど(と薫君は実に残念に思っているらっしゃったが)、かひなければ(今さら言っても始まらないので)、その夜のこともかけても言はず(あの妹君と二人きりで過ごした夜のことは決して口にせず)、忘れにけるにやと見ゆるまで(忘れてしまったかと思えるほど)、*けざやかにもてなしたまへり(あっさりとなさっていました)。 *「おぼゆ」は<思える。感じられる。>で、特定の<何かのように思える→似ている>という言い方にも成り、その何かが此処では<姉妹>ということらしい。訳文無しには私には全く理解できない語用だった。 *「けざやか」は<際立っているさま。はっきりとしているさま。>と大辞泉にある。が、此処では文意からして<何事も無かったような態度>なのだから、良く言えば<すっきりと割り切って>いるのだろうが、本心では悔やんでいるのだから<あえて触れずに→あっさりを見せて>いるということだろう。

[第七段 中君と薫、紅梅を見ながら和歌を詠み交す]

御前近き紅梅の(庭先近くの紅梅が)、色も香もなつかしきに(色も香も良い頃合いで)、鶯だに見過ぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば(ウグイスでさえ見過ごし難げに囀って枝を飛び移るようなので)、まして「*春や昔の」と心を感はしたまふどちの御物語に(まして、この花咲く春も姉君が生きていらした去年までとは違う、と心を感わしなさる御二人のお話し合いに)、折あはれなりかし(情緒が深まることでしょう)。風のさと吹き入るるに(庭からの風が御部屋にさっと吹き入ると)、花の香も客人の御匂ひも(花の香も薫君の匂いも)、*橘ならねど(古歌に故人を思い出すと詠まれた橘とは違う香りだが)、昔思ひ出でらるるつまなり(姉君が思い出される切欠です)。 *「春や昔の」は注に<薫の心中。亡き大君を思う。『源氏積』は「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」(古今集恋五、七四七、在原業平)を引歌として指摘する。>とある。 *「橘ならねど昔思ひ出でらるる」は注に<『奥入』は「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集夏、一三九、読人しらず)を引歌として指摘。「昔」は故人の大君をさす。>とある。

「つれづれの紛らはしにも(日々の気晴らしにも)、世の憂き慰めにも(厭な事を忘れるためにも)、心とどめてもてあそびたまひしものを(姉君はこの紅梅を心に留めて愛していらっしゃるのに)」など、心にあまりたまへば(など妹君は胸を詰まらせなさって)、

「見る人もあらしにまよふ山里に、昔おぼゆる花の香ぞする」(和歌 48-06)

「山里に 主無しとて 梅香る」(意識 48-06)

*注に<中君の詠歌。「あらし」に「あらし」を掛ける。>とある。訳文は<花を見る人もいなくなってしまうように、嵐に吹き乱れる山里に、昔を思い出させる花の香が匂って来ます>とある。この歌の下句が、前注で指摘された古今集 139 番の下句「昔の人の袖の香ぞする」をなぞっている事から、下の薫君の返歌も古今集の歌を下敷きにした詠み方で同調を示した、ということらしい。

言ふともなくほのかにて、たえだえ聞こえたるを(詠み上げるともなくかすかにぼつぼつと聞こえた、その姫の歌を)、なつかしげにうち誦じなして(薫君は懐かしんで復唱して口ずさむと、こう返歌なさいます)、

「袖ふれし梅は変はらぬ匂ひにて、根ごめ移ろふ宿やことなる」(和歌 48-07)

「同じ香と 思えば別の 宿の梅」(意識 48-07)

*注に<薫の返歌。『全書』は「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖触れし宿の梅ぞも」(古今集春上、三三、読人しらず)を引歌として指摘。>とある。当歌は全くこの引歌のモジリで、モジリで有る事が妹姫への同調を示す、という趣きのようだ。「根込め」は<根のついたままであること。根ぐるみ。根ごと。>と大辞泉にある。

堪へぬ涙をさまよくのごひ隠して(抑え切れない涙を体裁よく拭い隠して)、言多くもあらず(言葉少なに)、

「またもなほ、かやうにてなむ、何ごとも聞こえさせよかるべき(今後もまたこのように何事もお話し申したいものです)」

など、聞こえおきて立ちたまひぬ(など申し置いて薫君は席をお立ちになりました)。

御渡りにあるべきことども、人びとにのたまひおく(御引越に際しての注意事項を女房たちに言い置きなさいます)。この宿守に、かの鬚がちの宿直人などはさぶらふべければ(この山荘の留守居役に例の鬚面の門番などは居残るようなので)、このわたりの近き御荘どもなどに(宇治近郊の中納言所領の荘園管理者たちに)、*そのことどもものたまひ*預けなど(その面倒を見るように申し付け)、こまやかなることどもをさへ定めおきたまふ(こまごまとした具体的な事柄までも決めて置きなさいます)。 *「そのことども」は、山荘に居残る者が居る事と、その者たちの生活の面倒、をいうらしい。 *「あづけ」は<委任>で山荘の生活の面倒を任せること、らしい。「のたまふ」は<言い付ける、命じる>。

[第八段 薫、弁の尼と対面]

弁ぞ(老女の弁は)、

「かやうの御供にも(姫君の上京に御供するの)、思ひかけず長き命いとつらくおぼえはべるを(思いがけず長生きしているこの身にはとても辛く思えますので)、人もゆゆしく見思ふべけれ

ば(この老醜を都の人も気味悪く見て思うでしょうから)、今は世にあるものとも人に知られはべらじ(今後は生きていても人に知られずにいよう)」

とて、*容貌も変へてけるを(とすることで剃髪出家していたのを)、しひて召し出でて(中納言は強いて呼び出して)、いとあはれと見たまふ(とても感慨深くお思いになります)。 *「かたちもかへてける」は注に<弁が出家したことは初出。>とある。

例の、昔物語などせさせたまひて(いつものように姉姫の思い出話などさせ為さって)、

「ここには、なほ、時々は参り来べきを(此処にはまた時々は参り来る心算ですが)、いとたつきなく心細かるべきに(誰も居なくては心細いところに)、かくてもものしたまはむは(あなたがこうしていらしてくれたら)、いとあはれにうれしかるべきことになむ(とても有難く嬉しいことです)」

など、えも言ひやらず泣きたまふ(など言い終わる前にお泣きになります)。

「*厭ふにはえて延びはべる命のつらく(厭わしく思うほど延びる長生きが辛く)、またいかにせよとて(また私にどうしろという心算で)、うち捨てさせたまひけむ、と恨めしく(姉姫は先立ちなされたのかと恨めしく)、なべての世を思ひたまへ沈むに(この世の全てを悲観しておりますので)、*罪もいかに深くはべらむ(達観出来ない罪もどんなに深いことでしょう)」 *「いとふにはゆ」は<嫌うほどに栄える>。「厭ふ」は終止形で<嫌うこと>をいう抽象名詞。「に」は基準状態を示す格助詞。「はゆ」は「栄ゆ」で<盛んになる>。「厭ふに栄ゆ」は<嫌うことで盛んになる→嫌うほど勢い付く>。 *「つみ」は何を指すのか分からない。悲観も拘りではありそうだから、無常を悟らぬ執着心、ということだろうか。

と、思ひけることどもを愁へかけきこゆるも(と弁が出家にいたる思いの丈を訴え申すのも)、かたくなしげなれど(思い込みが強そうだが)、いとよく言ひ慰めたまふ(薫君は同情を示して言い慰めなさいます)。

いたくねびにたれど(弁はだいぶ年老いているが)、昔、きよげなりける名残を削ぎ捨てたれば(若い頃はきれいだったらしい面影のある頭を丸めていたので)、額のほど、様変はれるに、すこし若くなりて(額つきが目新しく少し若返って)、さる方に雅びかなり(それなりに華やかさが有ります)。

思ひわびては(それにつけても薫君は、出家を望んでいらっしゃった故姉姫を悲しく思い出しては)、「などかかる様にもなしたてまつらざりけむ(どうしてそうさせて差し上げなかったのだろう)。それに延ぶるやうもやあらまし(それで寿命が延びる事もあつたらう)。さても(そうした形になっても)、いかに心深く語らひきこえてあらまし(どれほど深い思いで語り合い申せたことだろうか)」

など、一方ならずおぼえたまふに(などしみじみ思えなさると)、この人さへうらやまなければ(この弁の尼までが優れた人に思えるので)、隠ろへたる几帳をすこし引きやりて(仕切りの几帳を少しずらして)、こまかにぞ語らひたまふ(親密にお話しなさいます)。

げに(実際)、むげに思ひほけたるさまながら(弁は頼りなく呆けた様子ながら)、ものうち言ひたるけしき、用意、口惜しからず(口の利き方や素養、物腰など捨てたものではなく)、ゆゑありける人の名残と見えたり(育ちの良さを偲ばせる片鱗が窺えました)。

「さきに立つ涙の川に身を投げば、人におくれぬ命ならまし」(和歌 48-08)

「さきに立つ 涙の川に 身や投げむ」(意識 48-08)

*注に<弁の尼の詠歌。『完訳』は「--ば--まし」の反実仮想の構文。死なぬ身の悲しみと大君との死別を嘆く」と注す。>とある。「身を投げば人におくれぬ命ならまし」は歌謡曲調の泣かせ文句だが、それだけに事物を引いて見る機転や工夫の軽さは無い。「先に立つ」は<先立った故人を悼む>と<思わず出る>の複意だろうし、「涙の川」も<悲しみに止め処なく流れる涙>を<川>に例えて言うことは説明不要の分かり易さだし、全体に今でもこのまま通じるが、既にこの時点で使い古された言い回しだったような感はある。というか、この詠み方では、本気で何かを訴えようとする姿勢が伝わって来ないし、何かの引歌を下敷きにしていてこそ、此处でこういう詠み方をする情緒が有りそうに思えてならない。上に「ゆゑありける人の名残と見えたり」とあるのも、如何にも前フリっぽく見えるが、当歌についての参照歌指摘は無いようだ。

と、うちひそみ聞こゆ(と弁は眉をひそめて詠みます)。

「それもいと罪深かなることこそ(そういう自害もとても罪深いことなので)。かの岸に到ること、などか(極楽彼岸に至ることなどどうして出来ましょうか)。さしもあるまじきことにてさへ(そんなにも間違いを犯してまで)、深き底に沈み過ぐさむもあいなし(深い底に沈み過ぐすとこのも割に合いません)。すべて、なべてむなしく思ひとるべき世になむ(すべて皆無常だと悟るべき世の中なのです)」

などのたまふ(など薫君は仰います)。

「身を投げむ涙の川に沈みても、恋しき瀬々に忘れしもせじ」(和歌 48-09)

「身を投げて 浮かぶ瀬も無い 涙川」(意識 48-09)

*注に<薫の返歌。「涙の川」「身を投ぐ」の語句を用いて返す。『花鳥余情』は「涙川底の水屑となり果てて恋しき瀬々に流れこそすれ」(拾遺集恋四、八七七、源順)を引歌として指摘。『集成』は「「瀬々」は折々というほどの意」と注す。「瀬」「川」縁語。>とある。当歌がこの引歌を下敷きにしていないのは間違いなだろう。しかも、私には引歌の方が優れて見えるし、薫君自身もそれを承知で、愛嬌としてこんな詠み方をして見せている、ような気がする。どうも、弁の歌詠みからして、この贈答は冗句、少なくとも本気の歌筋ではなく、姉君への追悼意はありつつも、詠み方自体を遊ぶという互いの認識を前提として交わされているように思えてならない。

いかならむ世に(いつになったら)、すこしも思ひ慰むることありなむ(少しは悲しみが鎮められることがあるのだろう)」

と、果てもなき心地したまふ(と終わらない気がしなさいます)。

帰らむ方もなく眺められて、日も暮れにけれど(帰る気になれず物思いに沈んで日も暮れたが)、すずろに旅寝せむも、*人のとがむることやと(そのまま漫然と旅寝するのも、姫の輿入れの前日に男が泊まるというのは、世間の非難を受けると)、あいなければ、帰りたまひぬ(不都合なのでお帰りになります)。 *「人のとがむることやと」は注に<句宮が自分と中君の関係を邪推しはせぬかと。>とある。勿論それはあるだろうが、是は敬語遣いが無いので、むしろ其以前に、この場の女房たちの視線からして許されそうもない、みたいな言い方と読んで置く。

[第九段 弁の尼、中君と語る]

思ほしのたまへるさまを語りて(中納言殿が姉君を悼む思いを仰っていたことを話しては)、弁は、いとど慰めがたくくれ惑ひたり(弁はいっそう鎮め難く悲しみに暮れていて)、*皆人は心ゆきたるけしきにて(他の女房たちは皆、上京を楽しみにしている様子で)、もの縫ひいとなみつつ(外出着の仕立て直しをしながら)、老いゆがめる容貌も知らず(老い衰えた姿にも関わらず)、つくろひさまよふに(身繕いに勤しむ中で)、*いよいよやつして(ますます疲れた様子で)、 *「みなひとは」は注に<他の女房たち。京の句宮邸への移転に心はずんでいる。>とある。 *「いよいよやつして」は注に<主語は弁尼。>とある。非常に分かり難い主語省略で、であれば、此処の構文は「いとど慰めがたくくれ惑ひたり」で句点とせず、読点で此処に繋げて、「皆人は~つくろひさまよふに」が挿入句なのだろう。

「人はみないそぎたつめる袖の浦に、一人藻塩を垂るる海人かな」(和歌 48-10)

「袖の浦 降るも晴れるも 風次第」(意識 48-10)

*注に<弁の尼の詠歌。「袖の浦」は出羽国の歌枕(最上川の河口、酒田市)。「発つ」と「裁つ」、「浦」と「裏」、「海人」と「尼」の懸詞。「裏」「裁つ」は「袖」の縁語。「藻塩」「海人」は「浦」の縁語。技巧的な詠歌。>とある。「袖の浦に」「藻塩を垂るる海人」という情景詠みに<隠れて袖を涙で濡らす尼>という隠棲者の人知れぬ悲しい情感を乗せる手法は定番の詠み方なのだろう。で、後は「袖の浦」を「袖の裏」にずらしと、「裁つ<着物を仕立てる>」に繋がる。で、その「裁つ」が「(旅)立つ」にずれて、「人は皆(女房たちが皆)」「急ぎ発つめる(支度して旅立つらしく)」「急ぎ裁つめる(忙しく仕立てるような)」と重ね詠んで「袖の裏」を引き出す、という工夫。しかし、どうなんだろう。是は弁自身に詠ませるよりも、妹君か中納言か、とにかく他人に詠んで貰う設定だと、詠者の機転も弁の侘しさも際立って印象付くような気がするが、そういう場面には持って行けなかったんだろうか。是を自分で詠んだという形だと、その「一人藻塩を垂るる海人」という状況への客観視が妙に理屈立って、ずいぶん頭でっかちな詠みっぷりに見えてしまうのが興醒めだ。

と愁へきこゆれば(と妹君に嘆き申すと)、

「塩垂るる海人の衣に異なれや、浮きたる波に濡るるわが袖」(和歌 48-11)

「舟出して 悲しい波に 濡れる袖」(意識 48-11)

*注に<中君の返歌。弁の尼の「袖」「尼」の語句を用いて返す。『河海抄』は「心から浮きたる舟に乗りそめて一日も波に濡れぬ日ぞなき」(後撰集恋三、七七九、小野小町)を引歌として指摘。>とある。「異なれや」は、形容動詞「異なり(ことなり、違っている)」の已然形に疑問や反意の係助詞「や」が付いたもので、已然形は想定条件を示

す語尾変化だから異なるとして考えられるだろうか、否考えられない＝違いはしない>という言い方だ。「浮きたり」の「たり」は動詞の連体形に付いて、その動作状態を示す助動詞で、物理的に「浮いている＝舟に乗っている＝旅立っている」とか、心理的に「浮ついている」みたいな言い方だ。が、是は「憂きたり」に掛けてある。が、この「憂きたり」の「たり」は体言に付いて、その事物の性質を強調する助動詞で、「憂き」が「憂し」の連体形名詞だということが、「浮きたり」と同音になるという面白さになっている。

*世に住みつかむことも(世俗塗れの都に住み着くというのも)、いとありがたかるべきわざとおぼゆれば(私にはとても出来そうもなく思われますので)、*さまに従ひて(近いうちに、あなたに習って、私も出家し此処に戻り住み)、ここをば荒れ果てじとなむ思ふを(この故宮の隠棲地を荒れ果てさせないようにしようと思しますので)、さらば対面もありぬべけれど(そうなれば此処であなたとまたお会い出来ますが)、しばしのほども(それまでの少しの間であっても)、心細くて立ちとまりたまふを見おくに(あなた一人が心細く此処にお残りなさるのを見置いて上京するのは)、いとど心もゆかずなむ(本当に気が進みません)。 *「世に住みつかむこと」は注に<以下「時々も見えたまへ」まで、歌に続けた中君の詞。句宮との結婚に対する不安をいう。>とある。「世」は<男女の仲>であり、もっと広く<生活>でもあり、そういう意味合いでの語用ではあるだろうが、此処では「浮きたる波(旅立ち)」を受けた言い回しなので、行き先の京都を俗世の中心地と見立てて、「ここ」に残る隠棲者の尼の弁に姫がこういう言い方をしている、という趣きなのだろう。 *「さまにしたがひて」は注に<事情によっては、ここに帰ってくる可能性があるかもしれないので、この山荘を荒れ果てさせまい、の意。>とある。が、「事情によっては」というのでは、事情が違えばその限りではない、という言い方になってしまう。「さま」は<あなたさま>とは読めないのか。特に、剃髪出家を<さま変はる>ということもあるので、そういう掛詞のように見ると楽しい。それに、その文意の方が「荒れ果てじ」という決意に合致する。

かかる容貌なる人も(でも、尼姿の人も)、かならずひたぶるにしも絶え籠もらぬわざなめるを(必ず頑なにも社会と断絶しては修行に籠もらないようですので)、なほ世の常に思ひなして(今後も変わらずに)、時々も見えたまへ(時々は会いに来てください)」

など、いとなつかしく語らひたまふ(など姫は弁にととても親しくお話しなさいます)。昔の人のもてつかひたまひしさるべき御調度どもなどは(姉君がお使いになっていた風格ある御調度類などは)、皆この人にとどめおきたまひて(全てこの弁の物として残し置きなさって)、

「かく、人より深く思ひ沈みたまへるを見れば(このようにあなたが姉君の死を誰よりも深く悲しんでいらっしゃるのを見ると)、前の世も、取り分きたる契りもや、ものしたまひけむと思ふさへ(前世にも特別な縁がお有りだったのかとさえ思えて)、睦ましくあはれになむ(あなたに深い親しみを覚えます)」

とのたまふに(と姫が仰ると)、いよいよ童べの恋ひて泣くやうに(弁はいよいよもって子供が親との別れを恋しがって泣くように)、心をさめむ方なくおぼほれみたり(気持ちを抑えようもなく涙に溺れていました)。